

# モームのリアリズム小説 「Liza of Lambeth」論

A Study of “Liza of Lambeth”  
in Maugham’s realism novel

田 中 正 志

(一)

William Somerset Maugham (1874~1965) は小説家であり、劇作家、随筆家でもあるが詩はかいていない。長篇小説20、短篇91、劇25、随筆と旅行記を14冊を世に公にしているのである。

Maughamの小説家としての処女作がこの *Liza of Lambeth* で1897年にMaughamが23才の時に公にされた。

Maughamはこの初めての小説が彼の医師としての職業を放棄させ、生涯を物書きとしての歩みを始めるとは天知るのみで、全く、人生の進路を変更させた画期的作品となったものである。

Maughamは劇作家をまず最初に志し、数本の脚本をかくのだが一つ残らず劇場に受け入れられないため、まず二、三編の小説を書き、それによって劇場のマネージャーたちに脚本を見直させるに足るだけの名声を得るのが得策だと考えた。

出版社のFisher Unwin (1848~1935) は The Pseudonym Libraryという黄色い紙表紙の比較的短い長編小説の叢書を発行していた。そこでMaughamはUnwinにやや長い短編を二つ送付したのだが、彼はしばらくして、少々長さが

足りないという理由で返送してきたがそれと共にもし長編の作があるなら喜んで読ませてもらうという手紙にMaughamは有頂天になり、さっそく感謝の返事をかき、それを投函して十分後に、書きはじめたのがこの*Liza of Lambeth*である。Maughamにとって、Unwinの一通の手紙こそが、Maughamの人生を決定づけた貴重なものになったことは、今日、すべての人の認めるところである。

## (二)

当時、Maughamは聖トマス病院に昼間は勤務していたので小説をかくのは夜だけであった。聖トマス病院附属病院の四年生の時、内科の医局係、外科の助手として外来患者部も終了し、病院勤務の過程も終了し、産科で働いていた。*The Summing Up*に医学校時代のことを次のように述べている。

The medical profession did not interest me, but it gave me the chance of living in London and so gaining the experience of life that I hankered after. I entered St. Thomas's Hospital in the autumn of 1892. I found the first two years of the curriculum very dull and gave my work no more attention than was necessary to scrape through the examinations. I was an unsatisfactory student. But I had the freedom I yearned for. I liked having lodgings of my own, where I could be by myself; I took pride in making them pretty and comfortable. All my spare time, and much that I should have devoted to my medical studies, I spent reading and writing. I read enormously; I filled note-books with ideas for stories and plays, scraps of dialogue and reflections, very ingenuous ones, on what my reading and the various experiences that I was undergoing suggested to me. I entered little into the life of the hospital and made few friends there, for I was occupied with other things; but when, after two years, I became first a clerk and then a dresser in the outpatients' departments I began to grow interested. In due course I started to work in the wards, and then

my interest so much increased that when I caught septic tonsillitis through doing a post-mortem on a corpse that was in an unreasonable state of decomposition and had to take to my bed, I could not wait to get well to resume my duties I had to attend a certain number of confinements to get a certificate, and this meant going into the slums of Lambeth, often into foul courts that the police hesitated to enter, but in which my black bag amply protected me: I found the work absorbing. For a short period I was on accident duty day and night to give first aid to urgent cases. It left me tired out, but wonderfully exhilarated.(1)

(医師という職業には興味は持てなかったが、それはロンドンに住み、わたしが切望していた人生の経験を得る機会を与えてくれた。わたしは1892年の秋聖トマス病院にはいった。最初の2年間の課程はひどく退屈で、試験に合格するのに必要なだけしか、勉強には心を向けなかった。わたしは不満であった。しかし、憧れていた自由はあった。ひとりでいられる自分だけの下宿があるのがうれしかった。わたしは下宿をきれいに、居心地よくすることに誇りをもった。ひまな時はもちろん、医学に専心していなければならぬ時間でも、わたしは読んだり書いたりして過した。たくさんの量の本を読んだ。そして小説や戯曲のアイデアや対話や、読んだものとか、いろんな経験とかに示唆された、すこぶる率直な感想とかで、ノートを埋めた。わたしはほかのことで夢中になっていたので、病院の生活にもほとんどはいらなかったし、病院では友だちもつくらなかつた。ところが二年たって、外来患者係りになると、わたしは興味をもちはじめた。そのうちに病室で働くようになると、興味がなおままして来て、ふためとは見られぬほど腐敗した屍体を解剖している時腐った扁桃腺をちらと見て、ベットに逃げこんだ時も、仕事にもどれるまで気分がなおるのが、待ちきれないくらいであった。免状をとるために、きまった回数だけ分娩に立ちあわねばならず、このためラムベスの貧民窟へ、そして、しばしば、警官でもはいるのを躊躇するような、怪しげな横町には

いらざるを得なかったが、そんな場所でも黒靴が充分にわたしを護ってくれた。この仕事は、わたしにはひどく興味があった。ちょっとの間だが、急患に応急手当をしたり、夜昼なしの事故係りを勤めたこともあった。これは疲れたが、すばらしく面白かった。)

Maughamはテムズ川岸のランベス地区のスラム街での経験、赤裸の人生に触れ、人間が持ちうるあらゆる感情、人間がどのようにして死ぬか、人間がどのように苦痛に耐えるか、希望、恐怖、絶望が人の顔に描く黒いしわ、幻影としか思えないものを信じている人々の眼に、信仰が輝くのを見たし、自尊心のため、周囲のものに自分の魂の恐怖を見せまいとして、死の予感を皮肉な冗談で迎えさせる勇敢さを見たと*The Summing Up*の第19章で述べているがこれらがこの小説の材料となっていることは確かである。

(三)

ロンドンの貧民街のランベス地区のヴィア通り (Vere Street)、八月の第一土曜日の暑い日、この通りの片側40軒、向う側40軒の家があって、夕方になって住民は一人残らず外に出て、子供たちはクリケット、縄とび、たくさんの赤ん坊はあっちこっちで這いずりまわり、お腹の大きい女たちは家の前でcockney accentで自分たちのお産の話題でにぎあっている。男たちは数は少ないが外壁にもたれタバコをふかしている。

そこにイタリア人のオルガン弾きがやってきて、ダンス曲を演奏し、若い男女が踊っているところに主人公のLizaが現われる。

All at once there was a cry: "There's Liza!" And several members of the group turned and called out: "Oo, look at Liza!"

The dancers stopped to see the sight, and the organgrinder, having come to the end of his tune, ceased turning the handle and looked to see what was the excitement.

"Oo, Liza!" they called out. "Look at Liza; oo, I sy!"

It was a young girl of about eighteen, with dark eyes, and an enormous

fringe, puffed-out and curled and frizzed, covering her whole forehead from side to side, and coming down to meet her eyebrows. She was dressed in brilliant violet, with great lappets of velvet, and she had on her head an enormous black hat covered with feathers.(2)

(たちまち、叫び声が聞こえた、「ライザが来たよ」すると立っていた幾人かがふりかえって大声で叫んだ、「おおい、みろ、ライザだよ」踊っている連中も足をとめてそのほうを見ると、オルガン弾きも一曲の終りへ来ていたのでハンドルをまわすのをやめ、いったい何の騒ぎかとそっちを見た。

「やあ、ライザだ」と人々は叫んだ。「ごらんよ、ライザだわ、あら、ほんとに」

それは18才ぐらいの、黒い眼をした若い娘で、額いっぱい右から左まで、ふくらませて縮らせた大層な前髪を眉のところまで垂らしていた。着ているのはピロードの大きな折襟のついた派手なすみれ色のドレスで、頭には羽毛でおおわれた大きな黒い帽子をのせていた。)

美しい潑刺としたLizaはそこですばらしいダンスを披露し若い男たちの喝采を一斉に受け、男たちは彼女を追いかける。Lizaは逃げる途中一人の逞ましい髯を生やした大柄な中年男が彼女を軽々と持ち上げて彼女の頬に音をたててキスをしてしまう。Lizaは人々の嘲笑や哄笑のうずまくなかを、こそこそと姿を隠した。Lizaは近くの工場で働き、母と二人で暮らしている。Lizaの母Kemp夫人は兵隊だった亭主に死に別れ年金と雑役で暮らし、酒好きのだからしい女で頭痛とリュウマチの持病をもち、そのためLizaがそばにいないといつも不平を言う母親でもある。

Lizaに恋心をいだき熱心に求婚するTomがいるが彼からの散歩の誘いも求婚も断ってしまう。TomからLizaにキスした男が妻と五人の子持ちのJim Blackestonといい19号の家の一番上の二部屋へ越してきたのだと知らされる。

次の日は日曜日。朝からLizaは母親との口喧嘩をして外へ出た。すると、通

りにTomが彼女の出現を待っていて、翌日の公休日にChingfordまで大馬車が出るので一緒に行かないかと誘いをかけるがLizaは再度断って工場と一緒に働いている友人のSallyのところへ行き、その帰途Jimに声をかけられ、Lizaは真赤になり、すっかりまごついて返事ができない。

八月の第一月曜日は銀行休日で公休日。天気は申し分なかった。Lizaは酒場the Red LionにSally達が遠足に出かけるのを見送りに行くがJim Blakeston夫妻もその遠足に参加することがわかり、彼女も行きたくなり、断ったTomに遠まわしに再度、誘うようにうまくしむけて、結局遠足に参加する。

ろば乗り、ココ椰子落とし、合唱等でとにかく、楽しい一日を過す。帰途Lizaは家に入ろうとするところを妻を先に家に帰したJimが追っかけてLizaを抱き、接吻する。

翌朝、二日酔いで工場に行くが何よりもJim Blakestonの逞しい体つきが頭からみついて離れないことに気づいた。工場からの帰りにJimの家のまえで彼に会い、芝居を見に連れていくと誘われるが妻帯者とはいけぬと断るが、土曜日の夕方、六時半に入口のところで待つと言う。

女心をくすぐるJimに引かれているLizaは結局、彼と芝居をみて居酒屋で酒をのみ、人気のない通りを散歩し、人目を気にしつつVere Steetに帰ってくるがJimはLizaを放さず、強引に関係を結ぶ。

翌朝はLizaにとってすばらしいものであった。

MRS. KEMP was in the habit of slumbering somewhat heavily on Sunday mornings, or Liza would not have been allowed to go on sleeping as she did. When she woke, she rubbed her eyes to gather her senses together and gradually she remembered having gone to the theatre on the previous evening; then suddenly everything came back to her. She stretched out her legs and gave a long sigh of delight. Her heart was full; she thought of Jim, and the delicious sensation of love come over her.(3)

(ケンプ夫人は日曜の朝にはいくらかぐっすり眠る習慣だった、そうでな

ければライザはそれほどゆっくり眠ってはいられないはずであった。目をさますと、頭をはっきりさせようと思って目をこすった。やっと少しずつ、前夜劇場へ行ったことを思い出す、やがて、急にすべてが頭のなかによみがえった。彼女は両脚をまっすぐ伸ばして、歓ばしさに長い吐息をした。満ちたりた心であった。ジムのことを思うと、甘い、しびれるような恋のよろこびが彼女を包んだ。）

LizaにとってJimは最も身近な存在となりその夜も彼の誘いによって町へ出て行く。二人の情事はこのよにして始まり、仕事が終わると毎晩、密会を重ねる。

時は九月になり、雨が降ろうが二人の密会は続き、あれだけ用心はしたものの、ついに二人の関係はLambethのVere街の人々の噂となりLizaにとって苦しい日々となる。まず、Jim Blakeston夫人は怒りを顔に表わし、友達からは冷たい態度をとられ、男たちからは下品な野次がとぶ。この間にSallyとHarryは結婚し幸福の絶頂にある。

十一月、寒さのため、二人の密会も今までのようにテムス河畔や公園ではできなくなり駅の三等待合室となった。夜が更け、わびしい密会が続くためJimは部屋を借りて同棲をせまるがLizaは母親の病気のため彼女を一人にすることもできず、また、Jimの子供達のことを思い反対する。

SallyからBlakeston夫人がLizaを捕えてひどい目にあわせると聞かされる。

Liza felt a chill run through her. She had several times noticed a scowl and a look of anger on Mrs. Blakeston's face, and she had avoided her as much as possible; but she had no idea that the woman meant to do anything to her. She was very frightened, a cold sweat broke out over her face. If Mrs. Blakeston got hold of her she would be helpless, she was so small and weak, while the other was strong and muscular. Liza wondered what she would do if she did catch her.(4)

(ライザは全身に悪寒を感じた。彼女は幾度かブレエストーン夫人の顔に儉

悪な怒りの表情を認めていたので、できるだけ避けてきた。だが彼女はあの女が自分に何かする気にいるとは、夢にも思ったことがなかった。彼女はすっかり狼狽し、冷汗が顔にふきだした。もしブレエクスト夫人につかまえられた、自分はとても敵わない、こっちは小柄で力が弱く、向うは力が強く骨節もたくましい。ライザは、いったい捕まえられたら何をされるのだろうかと言った。) )

もともと、Lizaは臆病なのでBlakeston夫人に逢うのを恐れてほとんど外出することもひかえていたがついに、彼女に逢うことになる。

It was the Saturday afternoon following this, a chill November day, with the roads sloshy, and a grey, comfortless sky that made one's spirits sink. It was about three o'clock, and Liza was coming home from work; she got into Vere Street, and was walking quickly towards her house when she saw Mrs. Blakeston coming towards her. Her heart gave a great jump. Turning, she walked rapidly in the direction she had come; with a screw round of her eyes she saw that she was being followed, and therefore went straight out of Vere Street. She went right round, meaning to get into the street from the other end and, unobserved, slip into her house, which was then quite close; but she dared not risk it immediately for fear Mrs. Blakeston should still be there; so she waited about for half an hour. It seemed an age. Finally, taking her courage in both hands, she turned the corner and entered Vere Street. She nearly ran into the arms of Mrs. Blakeston, who was standing close to the public-house door.(5)

(その週の土曜の午後であった。路がぬかるんで、空は憂うつな灰色に曇った、気の沈む十一月のそら寒い日であった。三時頃、ライザは工場から帰ってきた。ヴィア・ストリートに入って、急ぎ足にわが家へ向って歩いている



とき、彼女は向うからブレエクストン夫人の来るのを見た。心臓がどきんとした。振向いて、大急ぎでもと来た路を引返した。すばやく眼をはたらかせて、彼女はつけられていることを知り、まっすぐヴィア・ストリートを出てしまった。ぐるりと遠まわりして、通りの向う端から入り、気づかれぬうちに家のなかへ逃げこもうと思っていた。家は向う端に近かった。だが彼女はブレエクストン夫人がまだ居るかもしれないと思って、すぐにはその危険が冒せなかつた。それで半時間ほど待った。まるで、百年も待ったような気がした。とうとう両手を握りしめて、勇気を出して角を曲り、ヴィア・ストリートへ入った。彼女は危うくブレエクストン夫人の腕にぶつかるところだった。相手は居酒屋の入口近くに立っていたのである。)

ついに、二人の女の闘いは展開する。大勢の群衆の中で女たちはLizaに敵意をもって悪口を言い、男たちはボクシングの試合のように興味をもって、この壮絶なるけんかをながめた。そこにJimがあらわれて、二人をはなし、Tomも姿をあらわし、血だらけのLizaを彼女の家まで連れていく。

Tomは今でもLizaを愛していることを告白するがすでに子供を身ごもっているのをそれを拒否する。Tomは淋しく出て行き、彼女はベットに身を投げ出し泣きくずれる。

やがて母親が帰宅し、その母親から酒を飲まされ二人で酒宴となりLizaはBlakeston夫人との争いを忘れ、そのまま寝てしまう。

真夜中ごろ、Lizaは眼をさまし、口のなかが熱く、動くとき頭の中を鋭い、刺すような痛みをおぼえる。翌日、Tomが見舞いに来てLizaの工合が悪いことを知らされる。夕方にはまた熱が出て、頭痛が一層にひどくなり、全身に恐ろしい苦痛をおぼえ、陣痛のため悲鳴をあげ、母親は隣人に助けを求め、医師を連れてきてもらい、Lizaが妊娠していることを知る。Lizaはその後、昏睡状態となり、その日の夕方には危篤状態となり、Jimがあらわれ、顔をLizaの上に伏せて、苦悩にみちた声で叫んだ。

“Liza, Liza, speak ter me! Liza, say you forgive me! Oh, speak ter me!”  
(6)

(「ライザ、ライザ、何か言ってくれ！ ライザ、おれを赦すと言ってくれ！  
おお、何か言ってくれよ！」)

Lizaの昏睡状態は続き、Jimが帰った後の重苦しい気配がただよいそして、  
ついに臨終が訪れる。

(四)

Robert L. Calber氏に依ると*Liza of Lambeth*が書かれた環境の点でMaughamは二重の幸運にみまわれた<sup>(7)</sup>。

第一にロンドンの聖トマス病院の外来患者部の医学生として彼の任務は貧民窟小説にふさわしい直接に得られる知識を彼に与えられることになったMaughamは自分の経験を記録し、それがこの小説の資料の大半を与えるばかりでなく*Of Human Bondage*でも使用する資料を与えることになった。下町言葉のことわざやその話しぶりを記録しようと注意を払った。

第二は、恐らくはもっと重要な環境は、彼の医学の勉強のもつ客観的な、つきはなした態度であった。これがおどろくほど写実主義的小説にふさわしい見解を彼に与えることになった。聖トマス病院にいた何年間かは人生にたいする診断的接近法を彼に与え、これは執筆の全生涯をとおして、ある形をとって彼にのこることになった。Maughamがどんなにしばしば解剖の言葉をつかって書き、医者 of 体験を積んだ目で登場人物をながめているかを考えればこれは明白である。

Maugham自身は自分の処女作であるこの*Liza of Lambeth*についてPreface to *Liza of Lambeth*に次のように述べている<sup>(8)</sup>。

私は、虚構をほとんどしなかった。自分が見たり、聞いたりしたことを、できるだけ平明に筆にした。物語はひどく平凡な感じがしたので、自分の空想を加えて、刺戟的な派手なものにしたかったが、私にはどうすればそうなるのかわからなかった。自分の想像力が情けないほど貧しいために、私は事実にし

みつくことを余儀なくされた。その当時私はモーパッサンを非常に尊敬していたので、自分の物語を作るにあたってその作をお手本にした。若い作家がしばしば悪いお手本のまねをしやすいことを考えると、私は一つの物語をあのように明快に、直截に、効果的に物語る、偉大な天才の持主を範としたことを思っ  
て幸福を感じる。

Maughamは、Maupassantが24才の青年の時に生まれている。Maupassantはその頃、海軍省に就職、ただし、最初は無給でしばらくして有給となるが仕事にあまり興味をおぼえず、セーヌ河上でのボート遊びにふける、一方では毎日曜日にはパリ、ミュリヨ町四番地のFlaubertの家で彼に就いて七年間、勉強するのがゾラ、ドーデ、ツルゲーネフとの交りを得て強い文学的刺戟を受けた文学修業の最初の段階であった。Maughamもパリで生れ両親の死までそこで暮らしたのでMaupassantと同じ土地に住んでいたことになる。年令の差もあり、10才の時に英国に帰ったので二人は直接会う機会は無かったがMaupassantはその当時フランスで一流の作家で名声を得ていたのでMaughamにとって天上の人であったのだが、Maupassantの作品を少年頃からむさぼるように読み、18才までに彼の傑作はすべて読んでしまった位である。

Maupassantは1893年、死亡。Maughamが19才の時Maupassantの世界的名声が確立し、Maughamにとって最高の手本とする必然性があったのではないだろうか。

従って*Liza of Lambeth*はMaupassantを師として完成し、FlaubertからMaupassantへと継承されたrealismがこの小説の本流である。

完全なるrealismの定義を見出そうと欲するなら、それを探すべきは*Liza of Lambeth*の中にあると信じて主張する学者もある<sup>(9)</sup>。

Maughamの性格が論理的で明快さで明晰な文章を書けるという特性がMaupassantの影響に加えて、Lambethの貧民街に展開される下層階級の人間模様や哀歓をrealityに描写できたのがこの小説の成功の大きな要因ではないだろうか。

## (五)

Maughamは一体、この小説で何を言及したかったのであろうか。Robert Calderは偽善性という言葉でMaughamの心の中を看破しているが筆者にもこれは当を得たとらえ方だと確信する。

この小説の舞台となるVere Streetに展開する人間模様の葛藤の中で形式は大変重じられている。典型的な一例として、Lizaの母親をあげることができるのではないだろうか。

彼女は酒呑みでなまけ者で墮落しているのに、自分は教会で結婚式をあげたし、その証明書ももっていると一応、お上品ぶりを主張している。ところが恋愛についてはきびしい。従って、妻子ある男性との交際を求めたLizaに対するVere Streetの住民の目は彼女を「異端者」として糾弾する。

MaughamはLambethのVere Streetの約80軒の家屋の密集した社会のなかに一人の精神力がたくましく、生気にあふれ、どうしても予定された軌道には入っていけない娘を登場させて閉鎖的地域社会のルールを破る存在となる。この社会では妻に対する暴力、金銭の浪費は容認しても、妻子ある男性との交際には厳しいが故にLizaとJimの交際はVere Streetの社会生活の域外で行われなければならないとなり、Maughamはこの二人を逃亡者として扱う。そして、この貧民街の閉鎖的地域社会から出たときのLizaとJimが味う気楽さと自由感をMaughamはこの小説で表現している。

Maughamは当初、この小説の題名を「異端者」(The Pagan)と考えていたらしく、これは真にLizaのcharacterを如実に描写しているものである。

LizaはJimの女房とのけんかでなぐられ、母親と酒をのみ昏睡状態になり、夜の寒気にさらされ、更に、そのあとに続く流産が原因で物理的には死亡するのだがLambethのVere Streetという地域社会の目にみえないルールを逸脱、その結果として、その社会の復讐を受けるというrealism的悲劇ではないだろうか。

さらにCalderの言によると、このLiza of Lambethは貧民窟小説というより、特定社会の規則に一致させようとする圧迫から解放されようとする個人の試みの物語である。

Maughemは社会と個人を考える場合にどちらにウエイトを置いたのである  
うか。

彼のfocusは個人の主人公の生きざまそのものに向けられ、その後の彼の作品  
でも、そのテーマは継承されている。

<Bibliography>

- Maugham, W. S. ; Liza of Lambeth Heinemann 1897  
 Brophy John ; Somerset Maugham, Supplement to British Book News  
 Maugham, W. S. ; The Summing Up Heinemann 1938  
 Calder, R. L. ; W. S. Maugham and The Quest for Freedom, New York, Doubleda 1972  
 Maugham, Robin ; Somerset and All the Maughams, Greenwood Press Puess Publi-  
 shers  
 Janas Klaus W. ; The World of Somerset Maughem, Grenwood Press Publishers  
 Curtis Anthony ; Somerset Maugham, Macmillan Publishing Co, Inc. New York  
 Maugham Ted ; Maugham A Biography, Simon and Schuster New York  
 「サマセット・モームの全小説」 越川正三著 南雲堂  
 「モームの世界」 相良次郎著 評論社  
 「モーム研究」 中野好夫著 英宝社  
 「モーム」 上田 勤著 研究社  
 「モームの二つの世界」 山川鴻三著 京都あぼろん社  
 「サマセット・モーム小説群」 越川正三著 関西大学出版部  
 講座・イギリス文学作品論  
 「サマセット・モーム」 高見幸郎著訳 英潮社  
 20世紀英米文学案内19  
 「サマセット・モーム」 朱牟田夏雄編 研究社

<Note>

- (1) The Summing Up (Heinemann 1938) pp. 60-61
- (2) Liza of Lambeth (Heinemann 1897) p. 4
- (3) op. cit, p. 72
- (4) op. cit, pp. 102-103
- (5) op. cit, pp. 103-104
- (6) op. cit, p. 134
- (7) W. S. Maugham and The Quest For Freedom p. 51  
 (Heinemann 1972, Tranaslation Teizi Kitagawa)
- (8) Preface to Liza of Lambeth pp. viii-ix
- (9) Paul Dottin, Somerset Maugham et ses Romans p. 31  
 (Paris, 1928)